

ともしび

11 月 号

和国の教主としての聖徳太子

宮 崎 健 司

(大谷大学教授)

はじめに——親鸞聖人と聖徳太子——

おはようございます。大谷大学の宮崎と申します。本日は聖徳太子(五七四〜六二二)についてお話をさせていただきます。

聖徳太子が亡くなられたのは六二二年(推古天皇三十)で、千四百年の年忌が来年、二〇二二年に勤まりますが、聖徳太子といえば思い浮かべる絵画の聖徳太子像があります。現在は「唐本御影」(宮内庁蔵)と呼ばれるものですが、かつて一万円札に描かれていたものですが、これが本当に聖徳太子像かは、明確な論拠がないため、現在では伝聖徳太子像といわれたりします。このように聖徳太子の人物像をめぐるさまざまな議論がなされ、大きく変化してきていると思います。

さて、親鸞聖人(一一七三〜一二六二)と聖徳太子が深い関係にあることは、よくご存知かと思えます。親鸞聖人は、六角堂に参籠し、救世観音菩薩に化身した聖徳太子より夢告を受け、その内容を書き残されたものが「女犯偈」であるとされます。また晩年には聖徳太子の和讃をたくさんつくられました。自筆のものもあり、大谷大学博物館蔵「皇太子聖徳奉讃」(聖典五〇七〜五〇八頁)などもその一つです。さらに『上宮太子御記』(『定本親鸞聖人全集 輯録篇』第五卷、法藏館、一九六九年)という聖徳太子の伝記を著述されています。現在、覚如上人(一二七〇〜一三五二)筆になるものが西本願寺に伝わっています。このように親鸞聖人がいかに聖徳太子を敬慕されていたかがわかるのではないのでしょうか。実は親鸞聖人だけでなく、鎌倉時代の祖師たちも聖徳太子を敬慕されました。特に親鸞聖人の生まれる五十年ほど前には、聖徳太子信仰の勃興が認められ、一二二二年(保安二)に五百回忌にあたり法隆寺では大きな遠忌事業がありました。

本日は、聖徳太子の人物像がどう描かれていき、日本仏教の中でどのように位置付けられてきたのか、お話

ししたいと思えます。なお、後述するように「聖徳太子」という呼称には少し問題がありますが、ここでは一般的によく使われる呼称として「聖徳太子」を使用していくことにします。

仏教伝来

聖徳太子は、日本(当時は倭国)への仏教伝来、そして仏教が定着していく過程で、たいへん大きな影響を与えたといわれています。

当時の朝鮮半島は三国時代で、百濟、新羅、高句麗という三つの国からなっておりましたが、そのうちの百濟の聖明王という王が仏像、仏典、仏具を献上したということが仏教伝来の記事に出てまいります。その仏教伝来時期については二説あります。一つ

目は五三八年(欽明天皇七)説です。これは現存最古の聖徳太子伝じょうてくたいしでん「上宮聖徳法王帝説」(知恩院蔵、日本思想大系「聖徳太子集」岩波書店、一九七五年、三三三頁)や「元興寺伽藍縁起并びに流記資財帳」(醍醐寺

三宝院蔵、日本思想大系「寺社縁起」岩波書店、一九七五年、八頁)に記されているものです。もう一つは、五五二年(欽明天皇十三)説で、『日本書紀』欽明天皇十三年十月条(日本古典文学大系「日本書紀」下)岩

波書店、一九六五年、一〇〇頁)に、百濟の聖明王が使者を遣わして、釈迦の金銅像、仏具、経論を若干伝えた、という記事です。そして、ここで興味深いのは、聖明王がなぜ仏教を日本へ伝えたのか、その理由について、「仏の、我が法は東に流らむ、と記へるを果すなり」(同

右二〇二頁)と述べている点です。つまり、釈迦が仏典で「仏教は東に伝わる」と述べた言葉を実現するため日本へ伝えるのだといっています。実は仏典には仏教が東へ伝わりと明確に記したものはなく、『大般若経』卷第三百二・難聞功德品(「大正新脩大藏経」第六卷、般若

部二、五三九頁)に、釈迦が仏教は東北方へ広く流布するという文言を確認するにすぎません。

これと関わって、「仏法東流」「仏法東漸」という言葉がよく使われますが、その意味するところは、中国において、インド・西域から仏教が東にあたる中国へ伝わった歴史的な経緯を指して用いられたのではないかと思います。ところが、日本では、仏教が東に伝わるといふ点を強く意識し、東アジアの辺境たる日本への仏教伝来が必然であると受け止めようとしたと思われる。

仏教伝来時期については、近年、いろいろ議論されていますが、一般には五三八年説の方が有力ではないかと思われれます。少なくとも六世紀半ばに仏教が百濟から伝わったことは事実でしょう。

崇仏派と排仏派の論争

しかし、すぐさま仏教が受け入れられた訳ではありません。仏教伝来後の日本では、崇仏派と排仏派の論争が起こります。問題となったのは「蕃神」と「国神」の関係であったようです。「蕃神」とは仏教のことを指します。おそらく当時、仏教の内容が十分理解されず、外国の神と認識されたのでしょう。それで、わが国には神(国神)がいるのに、なぜ外国の神(蕃神)を崇拝する必要があるのかと議論されたようです。崇仏排仏論争はその後くすぶり続け、聖徳太子の時代に崇仏派の蘇我馬子(？)と排仏派の物部守屋(？)との間で再燃、やがて武力衝突へと発展します。この時、聖徳太子は叔父にあたる蘇我馬子とともに崇仏派に属しました。

ところで、崇仏派(聖徳太子・蘇我馬子)と排仏派(物部守屋)の衝突は時に宗教戦争と評されることもあります。現実的には当時権力

を二分した蘇我一族と物部一族の権力闘争という側面が強いと思われれます。ちなみに物部守屋は排仏論者だといわれますが、実は発掘調査によって物部氏が造立したと思われる寺院跡(浜川廃寺)が物部氏の別業の故地で発見され、物部氏も仏教信仰をもっていたとの指摘もあります。余談ですが、奈良時代後半の道鏡(?~七七二)は、弓削氏で物部守屋の末裔とされます。

両者の対立は、崇仏派勝利に終わり、仏教興隆がすめられます。蘇我馬子が日本で最初の本格的な寺院である飛鳥寺(のちの元興寺)を建立し、また聖徳太子も四天王寺などを造営します。『日本書紀』崇峻天皇即位前紀・用明天皇二年七月条(日本古典文学大系『日本書紀下』一六三~一六四頁)によれば、物部守屋との戦いにあたって、聖徳太子みずから四天王像を彫刻し、戦勝祈願して、戦いに臨んだことがドラマチックに語られています。まさに聖徳太子が仏教興隆の象徴的存在として描かれていたことがうかがえます。それでは、あらためて聖徳太子とはどのような人物なのかご紹介したいと思います。

聖徳太子とは

聖徳太子は、五七四年(敏達三)に、のちの用明天皇(?~五八七)と穴穂部間人皇后(?~六二二)の間に第二子として誕生し、六二二年(推古三十)に亡くなったとされています。仏教を篤く信仰され、五九五年に来朝した高句麗僧・慧慈(?~六二三)を師とされました。そして、その仏教的な素養をもって蘇我馬子とともに推古朝の政治を行いました。聖徳太子が六〇四年に制定した「十七条憲法」の第二条には著名な「篤く三宝を敬え」(聖典九六三頁)がみえ、仏教を

前面に押し出した政治姿勢を読み取ることができます。聖徳太子が建立した寺院がいくつかありますが、もっとも有名なものが法隆寺でしょう。法隆寺の東院伽藍の中心には夢殿という堂舎がありまして、この夢殿の本尊が聖徳太子の姿を写したといわれる救世観音菩薩立像(国宝)です。

聖徳太子の仏教的な業績として高く評価されるのは『法華経』『維摩経』『勝鬘経』という仏典の注釈書です。これらの仏典を三経と称し、その注釈書を「三経義疏」といいます。また聖徳太子追善のために制作された「天寿国繡帳」(国宝、中宮寺蔵)というものがあります。もともと法隆寺にあったものが、中世に何らかの事情で中宮寺へ移り、のちに発見され、今日に至ります。この「天寿国繡帳」はもと二張あったようですが、今日伝わるものは一張のみです。現存のものには四カ所に亀が配され、それぞれの甲羅に四文字ずつの漢字が刺繍されています。もとは百個の亀に四百文字の聖徳太子の伝記が記されていたようです。その全文は『上宮聖徳法王帝説』に引用され、内容を知ることができます。その中で聖徳太子が「世間は虚り仮りにして、唯仏ノミ是真ソ」(日本思想大系『聖徳太子集』三七一頁)と語ったと出てきており、聖徳太子の仏教への深い造詣のほどがうかがえます。

呼称をめぐる

これまで「聖徳太子」と申ししてきましたが、実は近年の高校日本史の教科書では「厩戸王」と記され、「聖徳太子」と付記されるものがほとんどです。二〇一七年に文部科学省は、学習指導要領の改訂に際し、「聖徳太子」か「厩戸皇子」あるいは「厩戸王」か、呼称をめ

ぐる議論の結果、次のような方針を示しました。聖徳太子が『古事記』や『日本書紀』においては「厩戸皇子」などと表記され、後に「聖徳太子」と称されるようになったことに触れる、というものです。なぜそうなったかという点、聖徳太子として語られる人物像を確認できる史料があまりないからです。『日本書紀』は八世紀初めに編さんされた歴史書ですが、中身を吟味せずそのまま信用することはできません。聖徳太子在世時の史料に「推古朝遺文」と呼ばれる一連のものがありませんが、近年の研究では否定的な意見も強く、これら史料をもつてしても聖徳太子像を十分に描くことができないとされています。

聖徳太子伝にみる聖徳太子像の形成

では、こうした聖徳太子の人物像はどのようにつくられていったのか、聖徳太子の伝記の形成を紹介し、見ていこうと思います。

聖徳太子伝はたくさん作成されており、『日本書紀』の記事もその一つといえます。七世紀末の『上宮記』は最古の聖徳太子伝だと考えられますが、現存せず、わずかに『釈日本紀』『聖徳太子平氏伝雑勘文』に引用されるのみです。現存する最古のものは先述の『上宮聖徳法王帝説』で、もつとも重要なものとなります。現状のものは九世紀ごろの成立と考えられますが、そのうち古い記述は七世紀にまでさかのぼります。

聖徳太子信仰は奈良時代(おおむね八世紀)を通じて隆盛していったらしく、この時代に多くの聖徳太子伝が制作されました。まず東大寺の明一(七二八〜七九八)がつくった、俗に『明一伝』と呼ばれるものがあります。残念ながらこれも現存しません。本書を天台宗の最澄(七六六〜八二二)が『天台法華付法縁起』に引用しています。こ

れも残念ながら現存せず、それをさらに引用したものに最澄の高弟である光定(七七九〜八五八)が『伝述一心戒文』巻下に「上宮厩戸豊聡耳皇太子伝」(『伝教大師全集』別巻、天台宗宗典刊行会、一九二二年、四頁として引いており、『明一伝』の一部が知られます)。

それから、七七二年(宝亀三)ごろに四天王寺の敬明によって『七代記』がつくられました。別名「四天王寺障子伝」あるいは「四天王寺聖徳王伝」といいます。これも現存せず、現在『異本上宮太子伝』(広島大学蔵)の記述でその存在が知られます。

七世紀後半、中国の鑑真(六八八〜七六三)と来日した弟子の思託が、当時の日本における高僧の伝記をまとめたものに『延暦僧録』があります。その中に「上宮太子菩薩伝」という伝がありました。これも残念ながら現存しません。東大寺の宗性(二〇二〜二二七八)が著した『日本高僧伝要文抄』に引用され、「上宮皇太子菩薩伝、同第二云」(『大日本仏教全書』第一〇一巻、仏書刊行会、一九一三年、六九頁)という朱書のタイトルが付されています。また、奈良時代末から平安時代初めにかけて『暦録』という歴史書がつくられ、その中に、先述の『古事記』『日本書紀』『七代記』の聖徳太子伝の記事が載せられています。

平安時代に入ると、現存する『上宮聖徳太子伝補闕記』や『聖徳太子伝暦』が完成します。特に後者は聖徳太子伝の集大成といえるもので、今日まで伝わるさまざまな聖徳太子の説話、それに伴う美術の原点といえます。

『聖徳太子伝暦』と『聖徳太子』という言葉の成立

『聖徳太子伝暦』は十世紀に成立したのですが、作者不明のた

め十世紀の前半か後半か、はつきりしません。また『聖徳太子伝暦』の注釈書もたくさん制作され、いわば教養書の一つとして平安時代後期以降に定着していきます。親鸞聖人の『上宮太子御記』の中にも『聖徳太子伝暦』を参考にされたと思われる部分が散見します。親鸞聖人の聖徳太子理解の基盤には『聖徳太子伝暦』があつたのではないかと思われます。

この聖徳太子伝の集大成とされる『聖徳太子伝暦』は、たいへん普及してまいります。そこで語られている聖徳太子を巡る説話や伝承について、少しご紹介したいと思います。

聖徳太子の名前は「厩戸」や「豊聡耳」と記されます。豊聡耳というのは、非常に聡明だという表現です。それから「上宮」という呼称は、かなり古い段階から使われています。また「聖王」「法王」という呼称もよく使われています。こうした表現から、聖徳太子の仏教への造詣の深さ、あるいは和国の教主としてのイメージが定着したのではないかと思います。

ところで「聖徳」という呼称が確認できる最古のものは七三八年(天平十)ころで、九世紀半ばの『令集解』という法律書にみえます。当時の法律家を明法家と申しますが、その一人である惟宗直本が著したものです。彼が参考にした注釈書に『古記』がありますが、これは七三八年成立の大宝令の注釈書で、その中に「聖徳」の呼称が確認できます。したがって、このところに「聖徳」という呼称が成立していたようです。そして「聖徳太子」という呼称は七五一年(天平勝宝三)の『懐風藻』という日本最初の漢詩集にみえます。つまり「聖徳太子」という呼称は八世紀の半ばを上限に成立したといえるかと思えます。聖徳太子に関する説話や伝承は、厩戸降誕説話、片岡山飢者説話など多く残されています。なかでも仏教との関わりとして重要な

は、小野妹子(生没年未詳)の『法華経』将来説であり、聖徳太子が前世、中国の僧として修行時に愛用した『法華経』を取りに行かせたという説話です。また南岳慧思(慧思禪師、五一五〜五七七)という隋の高僧の生まれ変わりが太子であるという説話、観音菩薩が口から胎内に入り、母・間人皇后は太子を托胎したという説話、あるいは太子が観音の化身であるという説話、古代インドの在家仏教徒である勝鬘夫人の再誕とする説話があります。また平安時代に成立した四天王寺の根本縁起である『四天王寺縁起 根本本』(国宝、四天王寺蔵)に「皇太子勝鬘」とみえ、これを根拠に「勝鬘」が聖徳太子の法名とされています。

慧思禪師後身説と、和国の教主

聖徳太子は、仏教伝来から仏教興隆に至る過程に、深く関わっていたとされています。ただし和国の教主として強く位置付けられていくのは、慧思禪師の生まれ変わりが聖徳太子であるという慧思禪師後身説が大きな意味をもっていたといえます。

七六七年(神護景雲元)に淡海三船がつくった漢詩のことが『伝述一心戒文』の「上宮皇太子菩薩伝」にみえています。それは称徳天皇(七一八〜七七〇)の諸寺巡行で、聖徳太子の寺へ淡海三船が同行したときのもので、本文そのものは八二七年(天長四)の『経国集』巻十に掲載され、「南岳に禅影をとどめて東州に応身を現す」(原漢文、『群書類従』第八輯、装束部・文筆部、統群書類従完成会、一九五九年、五〇九頁)とみえます。つまり慧思禪師が聖徳太子の生まれ変わりであることがうたわれています。また現存しませんが、鑑真の弟子の思託が記した鑑真の伝記『大唐伝戒師僧名記大和上鑑真伝』や『延暦僧録』、

唐僧法進(七〇九〜七七八)の『梵網経註』にも、慧思禪師後身説は記されています。それから、淡海三船が思託の鑑真伝を基に著した『唐大和上東征伝』には、「昔聞けり、南岳思禪、遷化の後、倭国の王子に託生して、仏教を興隆し、衆生を済度する、と。」(原漢文、『大日本仏教全書』第一三巻、仏書刊行会、一九一五年、一〇九頁)とあって、慧思禪師が日本の王子に生まれ変わって仏教を興隆したと、鑑真は聞いたとされています。このことから慧思禪師後身説は八世紀の後半に鑑真が来朝したところからいわれているのではないのでしょうか。

いわゆる末法思想の末法元年は一〇五二年(永承七)を指しますが、この当時、五五二年が末法元年と考えられていました。そして、この末法を最初に語ったのが慧思禪師であるといわれています。『日本書紀』において仏教伝来が五五二年とあるのは、この末法元年に日本へ仏教伝来したことが意図され、末法に正法を担うべきは日本であるという意識があつたのではないのでしょうか。このことを前提にすれば、日本において仏法東漸が強き意識されたのは当然のことであつたかと思われれます。このように、聖徳太子が慧思禪師の生まれ変わりであるという説話は、まさに日本における仏教の教主として、聖徳太子を強く意識させるものではなかつたかと思えます。

仏教興隆の祖としての聖徳太子

当時、授戒する資格をもつ僧侶は日本にいませんでした。正式な授戒には三師七証が必要でした。三師とは、正しく戒律を授けることができる戒和上、表白文、羯磨文を読む羯磨師、威儀作法を教える教授師の三人をいい、七証は授戒の儀礼が滞りなく行われたことを証する七人以上の師僧を意味します。

授戒の師を日本へ招聘するために、栄叡(？〜七四九)と普照(生没年未詳)が中国へ派遣されます。そして、栄叡と普照は鑑真と巡り会い、鑑真に対して日本へ渡来して欲しいと要請します。その際に交わされた会話には「昔、聖徳太子という人がおられて、二百年後に日本で仏教が興隆すると予言された」とあります。そして「日本における仏教興隆のために、ぜひどなたか授戒師として来てほしい」と懇願したことに対して、鑑真が語ったのが先述の言葉でした。ここでの会話では、聖徳太子による仏教興隆の予言が語られ、聖徳太子が仏教興隆の祖と位置付けられていたことがわかります。その仏教伝来から「二百年後」の仏教興隆こそが東大寺盧舎那大仏の開眼供養であつたと思われれます。またそれを主導したのが聖徳天皇(七〇一〜七五六)でした。

『日本書紀』のいう仏教伝来より二百年目とされる七五二年(天平勝宝四)四月九日に開眼供養が挙行されました。四月九日にも意味があり、当初は降誕会の四月八日が予定されていましたが、それは開眼師等を要請した聖武天皇の依頼文に四月八日と明記されていたこととでわかります(筒井英俊校訂『東大寺要録』国書刊行会、一九七一年、四六頁)。何らかの事情で、おそらく大仏殿前の露天に多くの参列者があつたと思われれますので、天候等による順延ではなかつたかと憶測します。

開眼師には菩提僊那(七〇四〜七六〇)という仏教発祥の天竺(インド)の僧侶が、呪願師には道瑤(七〇二〜七六〇)という唐の僧侶が当たっています。また盧舎那仏について説く『華嚴経』の講義も行われましたが、その講師は、隆尊(七〇六〜七六〇)という日本の僧が勤めました。つまりインド、中国、日本という仏教伝来を象徴する地域の僧侶たちが東大寺盧舎那大仏開眼供養に関わっており、この法

会を仏教興隆の頂点とする意識が込められていたものと思います。

次に大仏開眼との関わりで、聖武天皇と聖徳太子の関係について紹介します。聖武天皇は聖徳太子信仰をもっていたと思われれます。聖武天皇の法名は「勝満」といいます。聖徳太子の法名が「勝鬘」と考えられたことは先述のとおりですが、漢字に一部相違はあるものの、聖武天皇の法名と同音の「しょうまん」であったことが注意されます。そのため、のちには聖武天皇が聖徳太子の生まれ変わりであるという伝承も生まれてきます。このようにみると、聖武天皇は、仏教興隆の祖・聖徳太子の意思を継ぎ、仏教興隆を成就した聖徳太子の再来として自身を意識していたのではないかと思われれます。

聖武天皇の仏教信仰、聖徳太子信仰の背景には皇后の光明皇后(七〇一〜七六〇)やその母 県犬養三千代(？〜七三三)の存在は大きかったと思われれます。

光明皇后は、篤い仏教信仰や聖徳太子信仰をもった人物でした。七六一年(天平宝字五)十月十一日付『法隆寺東院縁起資財帳』(一七三六年(元文元)良訓書写本、法隆寺蔵)に、聖徳太子持物の仏典七七九巻を光明皇后が探し出して奉納したと記され、光明皇后が聖徳太子信仰をもっていたことがわかります。また光明皇后の母 県犬養三千代も篤い仏教信仰、聖徳太子信仰をもっていたと考えられます。光明皇后の仏教信仰や聖徳太子信仰も母親の影響ではないかと思われれます。先の資財帳には、県犬養三千代がやはり多くの聖徳太子持物を探し出して奉納したことが記されています。また 県犬養三千代の念持仏とされる阿弥陀三尊像が法隆寺に所蔵されていますが、加えて『無量寿経』などの浄土系を含む多くの仏典を所持していたことが知られています。これらのことから 県犬養三千代の仏教信仰の一端が伺えますが、とりわけ念持仏や『無量寿経』などから浄土信

仰をもっていたと思われ、奈良時代の浄土信仰を考える上でも注意されます。

こうした当時の聖武天皇を中心とする仏教信仰、聖徳太子信仰をめぐる状況の中で、仏教興隆の頂点としての大仏開眼会が盛大に開催され、その起点としての仏教伝来および仏教興隆の立役者としての聖徳太子のちに、和国の教主と称称されるような存在として位置付けられていったのではないかと思えます。そしてそれを継承するのが聖武天皇であったのではないのでしょうか。

仏教説話や教養書にみる聖徳太子

仏教の中で聖徳太子が重要な人物と位置付けられたのは、聖徳太子伝だけではありません。日本最古の仏教説話集『日本霊異記』上巻に「聖徳皇太子異しき表を示す縁 第四」(新日本古典文学大系『日本霊異記』岩波書店、一九九六年、二一頁)が載せられていますが、現行本の基になった七八七年(延暦六)原撰本では、筆頭に据えられていたことが明らかになっています。つまり九世紀の初頭には、聖徳太子が日本仏教の原点であることが明確に意識されていたといえます。次いで、源為憲(？〜一〇一一)が冷泉天皇(九五〇〜一〇一一)の皇女尊子内親王(九六六〜九八五)のために著した仏教史である『三宝絵詞』(新日本古典文学大系『三宝絵 注好選』岩波書店、一九九七年)があります。そこでも、聖徳太子が日本仏教の教主と位置付けられています。おそらく『三宝絵詞』は親鸞聖人も見ておられるようではないかと思われる箇所があります。

『日本霊異記』や『三宝絵詞』はいずれも、貴族の間で教養書とし

て読み習わされ、聖徳太子が和国の教主と認識されていたものと思われまゝ。のちに触れる聖徳太子伝の集大成ともいべき『聖徳太子伝暦』もまた、教養書として読み習わされていきます。

このように、少なくとも八世紀半ばごろには、「聖徳太子」という呼称が成立し、聖徳太子が日本における釈迦のような位置付けに定着し、平安時代の十世紀ごろに『聖徳太子伝暦』のような聖徳太子伝を通して普及して、平安時代後期には、貴族層や官人層に聖徳太子が日本仏教の祖であるという意識が浸透していきます。鎌倉時代の祖師たちも聖徳太子信仰をもっていたことは、こうした歴史を背景にしているのではないかと考えられます。史実としての厩戸王と和国の教主としての聖徳太子は、分けて考える必要はあるのかと思いますが、いずれも重要な意味合いをもつ存在であったといえます。

おわりに——仏教史における

聖徳太子絵伝と聖徳太子像の意味——

文字で記された聖徳太子伝を中心に紹介してきましたが、一方で文字を読めない人にも聖徳太子を伝えるため、絵伝として絵画化され、視覚的に表現されていきました。現存する聖徳太子絵伝は、『聖徳太子伝暦』に基づく重要な場面を絵画化したものです。

四天王寺の絵堂には、奈良時代後半ごろに太子伝の壁画があったようですが、焼失しており、現存するのは狩野山楽(一五五九—一六三五)筆である板絵のみです。絵があるということは、これを説明する絵解きが当然なされたと考えられます。たとえば十二世紀の半ばに書かれた藤原頼長(一一二〇—一一五六)の日記『台記』には四

天王寺で絵解きがあったと記されています。また『聖(正)法輪蔵』という別名でも知られる『文保本太子伝』は、絵解き台本のようなもので、こうしたものからも絵解きが行われていたことがわかります。

法隆寺東院の夢殿の北側には、絵殿がありました。聖徳太子絵伝の現存最古は東京国立博物館の法隆寺館に所蔵される一〇六九年(延久元)の聖徳太子絵伝(国宝)ですが、実はもと法隆寺にあったものです。明治時代に法隆寺からいくつものものが献上されたのですが、その中の一つでした。この絵伝も古いものですが、法隆寺絵殿にあったものはこれよりも古く、おそらく奈良時代にはすでにあったのではないかと思います。また京都の広隆寺も聖徳太子の寺として有名ですが、広隆寺の太子堂にある聖徳太子絵伝は、平安時代に制作されたものであったことが記録されています。しかし、これも残念ながら焼失しています。冒頭で十二世紀の聖徳太子五百回忌に聖徳太子信仰の一つのピークがあったとお話ししましたが、この頃から、聖徳太子絵伝のような美術が多く制作されたと推定されます。

次に彫刻ですが、鎌倉時代以降に制作されていきます。奈良の伝香寺の聖徳太子二歳像(南無仏太子像)は、釈迦信仰や舍利信仰と太子信仰が結び付く中でつくられたものといわれています。また法隆寺絵殿にあった聖徳太子七歳像(重文)は、子ども姿の角髪を結ったものになっています。鶴林寺(兵庫県加古川市)太子堂の柄香炉をもった聖徳太子十六歳像(孝養像)は、父用明天皇の病氣平癒を祈られたことに由来します。仏光寺(京都市下京区)の聖徳太子立像は、左手に柄香炉をもち、右手に笏をもっています。笏は俗人である貴族がもつもの、柄香炉は仏教者がもつものであるため、真俗二諦像と称されています。

先述の聖徳太子五百回忌には、法隆寺西院伽藍の僧坊の南側が改築され、聖霊院という太子を奉る堂がつけられました。この聖霊院には「聖徳太子摂政像」(国定)が安置されています。レントゲン調査によって、この像の体内、ちょうど聖徳太子の口元に頭部が来るように観音像が安置されているとわかりました。さらに、この中には「三経義疏」も収められていたようです。この摂政像も太子五百回忌のときに制作されたものになります。

また「聖徳太子伝暦」の伝える聖徳太子三十五歳の像に、「聖徳太子勝鬘経講讚坐像」(重文、中山寺蔵)があります。これは聖徳太子が「勝鬘経」を講説している姿を彫刻したものです。この聖徳太子像は前方を向いて講義している姿ですが、この講義は推古天皇に対して行われたものとされています。また、ここには蘇我馬子や小野妹子、師の慧思や覚智(生没年未詳)という儒教の師も配されています。このように聖徳太子信仰の隆盛と広範な聖徳太子信仰が展開するにあたり、「聖徳太子伝暦」の特徴的な場面が造形化され、さらに聖徳太子信仰が幅広く広がっていったと想定されます。

以上、話は多方面に涉りましたが、日本仏教の祖としての聖徳太子の人物像は、奈良時代半ばごろから形成され始め、平安時代、十世紀にはその位置付けが決定的となり、遠忌行事などを通して十三世紀の鎌倉時代以降、定着していくわけです。そのような聖徳太子への認識を背景に、親鸞聖人は聖徳太子を日本仏教の祖として受けとめられ、和国の教主と呼ばれたのではないかと思います。

(みやぎのき けんじ)

二〇二〇年一月十二日

東本願寺日曜講演抄録

〈親鸞聖人讃仰講演会のインターネット配信のご案内〉

※新型コロナウイルス感染症対策により、本年は事前申込制とし、申込は十月十五日にて締め切らせていただきました。なお、講演会の様子はインターネットにて同時配信いたしますので、是非ともご覧ください。

11月26日(木) 午後6時～8時30分

「自省利他社会を目指して」

龍谷大学学長 入澤 崇氏

「「すでにして願います」一本願となった釈尊の正覚」

大谷大学名誉教授 小川 一乗氏

11月27日(金) 午後6時～8時30分

「希望は無名の人々の中にこそ——U.K. ル・グウィン」

翻訳家・児童文学評論家 清水眞砂子氏

「因果の道理—誓願と業道を結ぶもの—」

親鸞仏教センター所長 本多 弘之氏

11月28日(土) 午後6時～8時30分

「親鸞聖人伝承の意味」

大谷大学名誉教授 草野 顕之氏

「阿弥陀仏は信ずる主体」

同朋大学名誉教授 池田 勇諦氏

【会場】 しんらん交流館 2階大谷ホール

【お問い合わせ】 真宗大谷派(東本願寺)教学研究部 TEL: 075-371-8750

<http://jodo-shinshu.info/> 浄土真宗ドットインフォ

検索





仏法のことにとりなせ

教学研究所長 楠 信生

蓮如上人の御掟に、「仏法のことをいうに、世間のことにとりなすひとのみなり。それをたいくつせずして、また、仏法のことにとりなせ」と、おおせられ候うなり。

〔蓮如上人御一代記聞書〕聖典八六六頁
蓮如上人は「仏法のことを話しているのに、世俗的な受けとめをする人はばかりである。それに退き屈することなく、また、仏法のことには姿を変えさせるようにしなさい」と説かれます。

仏法を聞くことは、容易なことではありません。まず私たちにはそれぞれ、これまでの生活で養われた習慣・感覚というものがあります。そして、その養われたものを基本に受け止めがなされます。したがって、仏法の話聞いて世俗の生活、つまり日常生活が問題となるのではなく、むしろ世俗の感覚を根拠に仏法を評論的に聞くことは当然のことになります。日常生活の知識が高度に進んだ現代は、蓮如上人の時代と比べて、世俗の論理を根拠にする状況がさらに進んでいると言えるのではないのでしょうか。

それに対して蓮如上人は「それをたいくつせずして、また、仏法のことにとりなせ」と語られます。退屈とは、現代では何もすることがなくて暇なことという意味で使われています。しかし元来は、困難に対して、退き屈すること、恐れ退くこと、嫌気がさして気力を失うという意味です。そして仏教語としては、仏道を求める心が退き屈するという意味です。

あらためて「仏法のことをいうに」を考えてみ

ると、世俗的な受けとめで仏法のことを話しているつもりになつていないかということがあります。「信心について語る人はいるが、信心で語る人がいない」という厳しい言葉があります。また「気のきいた話をしようとする人が語れば漫談になり、まじめな人が話せば感話になる。法話というのは難しいものである」という指摘もありました。このことは、感話のような法話では駄目ということではなく、法話には教えの本質を純粹に明確に伝える役目があることを話されたものと思います。その意味で「仏法のことをいう」のは、凡夫は仏陀ではないので、容易なことではありません。そうすると「それをたいくつせずして、また、仏法のことにとりなせ」に、さらに大切な意味があることが知られます。

「世間のことにとりなすひとのみ」ですから、そういう人ばかりであるということです。私もその一人であるのです。その一人である自分が「たいくつせずして、また、仏法のことにとりなせ」と言われるのです。

「たいくつせずして」ということは自らの心に鞭打って「退き屈しないように」と強い意志を持つてできるようなことではないのでしょうか。「たいくつせず」が個人の努力に由来するものであるならば、それはまた「世間のことにとりなす」ことになるのではないのでしょうか。大切なことは、退屈させないものは本人の強い意志ではなく、賜った僧伽、つまり「とも・同行」なのであります。

退屈しないことも仏法のことにとりなすことも、本人の作爲的な心によつて成しとげられるようなものではありません。如来の教えに帰して、賜った僧伽によつてこそ、「たいくつせずして、また、仏法のことにとりなせ」ということが具体的な力となるのであります。

今後の予定

※各行事は新型コロナウイルス感染症の状況により、急遽内容を変更する可能性があります。

▼東本願寺日曜講演 ▲（開会 午前九時三十分）

会場 しんらん交流館2階 大谷ホール

京都市下京区上柳町一九九 東本願寺北側

十二月一日（休会）

十二月八日「西田幾太郎における宗教と哲学」

京都大学名誉教授 氣多 雅子

十一月十五日「本願力と人間存在」

大阪教区即應寺前住職 藤井 善隆

十二月二十二日（休会）

十二月二十九日（休会）

十二月六日 大谷大学准教授 グシュ・シヨバ・ラニ

十二月十三日 教学研究所研究員 難波 教行

十二月二十日（休会）

十二月二十七日（休会）

▼親鸞聖人讃仰講演会▲

十一月二十六日〜二十八日 各日午後六時より

詳細は九頁をご覧ください。

▼高倉同朋の会▲

十一月は休会します。

お問い合わせ先（平日午前九時〜午後五時）

「ともしび」の内容、「高倉同朋の会」について

教学研究所 〇七五―三七―一八七五〇

「ともしび」の申し込み・支払い・発送について

東本願寺出版 〇七五―三七―一九一八九